

## 音楽、楽器のあるお墓

第8回の特別賞は群馬県富岡市の浅川 サクさん（当時70歳）は、楽しい旋律が流れてきそうな音符、鍵盤付きピアノ型お墓で入賞した。音符は小学校などで歌われる「大きな古時計」の一節。また、お墓に「寿」の文字が刻まれているが、お墓の前に立つと楽しいピアノの旋律が流れてきそう。御影石を磨いた部分は黒く、彫った部分は白く対照的なコントラストを表現する。以下は浅川さんのコメント。<夫は音楽の教師でした。一生涯音楽を愛し、生活のすべてが音楽の世界でした。音楽記号の代わりに「寿」の文字を使い、よく手紙を書いていた。今回の建墓に際し、子供たちがデザインに積極的に参加してくれました。ピアノの鍵盤も気に入っています。>



第11回で入賞した埼玉県久喜市の市川力三さん（当時52歳）のお墓は、亡き父もきっと楽しんでくれているのでは？オルガン型。亡き父は、母が奏でるオルガンに合わせ、ハーモニカを吹き、子供、孫たちが楽しむ姿がとても好きでした。家族の中心にはいつもオルガンがありました。父がお墓に納骨されても、母の奏でるオルガンが側にあれば、きっと天国で楽しんでくれるのではと思います。



第12回には宮城県仙台市泉区の境洋文さんは、趣味のエレキギターとアンプが出迎えてくれるお墓で入賞した。最愛の息子のお墓をつくるにあたり、ひとつは「飾り気がなく、全体に丸みをおびた優しいイメージの自然石」を使いたいことと、もうひとつは「息子が愛用していたギターとアンプをお墓に表現したい」と思いました。最初は素朴な雰囲気自然石にシャープなエレキギターがはたしてマッチするだろうか心配しましたが、お話を重ね、完成イメージの提案をいただき、とても素敵なデザインになりました。文字は心のやさしかった息子を偲び、「やさしさ」という文字を友人の書家に書いてもらいました。無垢な自然石に彫られた



心和む「やさしさ」の文字。そして今にもメロディが聞こえてきそうな思い出のギターが一体となったお墓。天国で、大好きなギターを弾いてますか。

第 15 回には北海道帯広市の大友 俊雄さん(当時 75 歳)の「打てば響く」太鼓型お墓が入賞した。プロパン会社を経営するかたわら、十勝発祥の和太鼓「平原太鼓」を郷土芸能として根付かせた 40 年間。生前にお墓を建てるなら、「平原太鼓」の振興に結びつき、さらには愛する帯広の観光 PR に役立つようなお墓をと計画。黒御影石で直径 1.4 メートル、幅 1.5 メートル、重さ 5.5 トンの和太鼓をドーンと正面に据えたお墓を建立した。金具やびょうなど細部にもこだわった。背屏風の左側には座右の銘である「打てば響く」を彫刻、右側に



第 16 回には千葉県山武郡の宮崎豊久さん(当時 40 歳)が入賞した。音楽家であった亡母のために、墓石に音符とミニチュアの石製ピアノを建立した。実際にソプラノ歌手でありピアノの教師をしていた母が愛用していたピアノの縮小版をピアノ演奏会のステージのように設置、墓石中央には華やかな母のイメージにピッタリな真っ赤なバラのステンドグラスを嵌め込んだ。



第 17 回は埼玉県東松山市の菅 ひとみさん(当時 45 歳)が、「響」の文字にベートーヴェンの「運命」の音符を刻んだ音響マニアの亡父のお墓で入賞した。私が子供の頃から、父は朝、目を覚ますと大音量で音楽を聴いている人でした。電子回路に詳しい父はアンプ、スピーカー、レコード針等に凝っていて、週末になると秋葉原まで、部品を買いに行き、より良い音で聴ける工夫を自分なりにして



いて、組み立てることも楽しんでいました。どんなお墓にするのか、家族でいろいろ案を出し合いました。父とすぐわかる「響」を中心に入れることはすぐに決まりましたが、その後で「♪を入れて欲しい」との父からの遺言をどこに入れるか、散々迷いました。母と妹からの提案で家紋を入れるべき場所に、父の好きだったベートーヴェンの代表曲である「運命」のタタターン、タタターンの音符を入れました。堀家らしく、家族で案を出し合い悪いところは全員が納得できるまで修正し仕上がったお墓です。天国の父もきっと喜んでくれていると思います。



第19回には山梨県北杜市の石山 正雄さんが、桜の花びらが吹き流れる様子とバイオリンを描いたお墓で入賞した。以前、私たちはお墓は要らないと思っていました。骨は山に撒いてくれれば良いと思っていました。しかし、現実的には撒骨は難しいことがわかりました。それにお墓は本人だけの問題ではないことも。息子にも「やっぱり石山家の墓は必要」と言われたこともあって、お墓の意味を考え直し、お墓を建てることにしました。



私はバイオリン作りに長年携わってきました。それで艶やかな黒御影の石碑にバイオリンを彫刻しました。バイオリンは、今にもメロディが聞こえてきそうな繊細な線画で、気に入っています。また、妻は桜が好きなこともあって、桜の花びらが舞うという動きのあるデザインを提案してくれました。完成したお墓には、私の両親と祖母の遺骨を分骨し、墓誌にも3名の名前を刻みました。

お墓が完成したことで、私は生前あまりできなかった親孝行ができたことを喜んでいます。また、子どもや孫にも、先祖とのつながりを実感してもらうことができる。お墓は生きている者にこそ必要なものなんだと改めて実感しています。跡継ぎは息子ですが、家族や友人たちも集える場所になればと思っています。だからあえて石碑に家名はいれず、絵にしました。美しい八ヶ岳南麓の風景をも取り込んで、まさに自然景観と一体化したデザインのお墓であると自負しています。

第20回には大阪府寝屋川市の玉田 恭子（78歳）が入賞した。音楽をこよなく

愛していた亡夫のために、グランドピアノ型の墓石にビオラと「ハーモニー」という言葉を刻んだ。それは商社の初任給 4 ヶ月分とボーナスを合わせて求めたほどだった。フルオーケストラで弾くグランドピアノを自宅に置きたがっていたが、自宅の床下の強度と広さの関係で無理だった。天国では思い切り音楽を楽しんで下さい、という願いが込められたお墓である。

